

特別支援学校（聴覚障害）に在籍する高等部3年生生徒の大学入試に向けた合理的配慮提供の取組1

1. 事例の概要

特別支援学校（聴覚障害）に在籍するA生徒（高等部3年生）が、合理的配慮の提供を受け第一志望の大学に合格した事例である。A生徒は大学進学を希望する高等部生徒である。幼稚部から特別支援学校（聴覚障害）に在籍しており、小・中学校に通った経験はなく、聞こえる人との交流も限られる。学校では手話と音声を活用しており、高等部入学後は補聴器や人工内耳を装用しないことも増えた。そこで、オープンキャンパス参加や自立活動の時間を通して自分に必要な情報保障について考える機会を設けた。

キーワード 大学入試、合理的配慮、聴覚障害、自立活動

2. 幼児児童生徒の実態

A生徒はB特別支援学校（聴覚障害）の高等部3年生で、普通科に在籍している。A生徒の平均聴力レベルは、右95dBHL、左90dBHLであり、先天性の感音性難聴である。右耳に人工内耳、左耳に補聴器を装用しているが、高等部に入ってからあまり装用していない。装用時の聴力レベルは右30dBHL、左45dBHLである。本人の主たるコミュニケーション手段は手話と口話であるが、発話には消極的な様子も見られる。各教科ともに、学年相応の学習ができています。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 近隣の特別支援学校（聴覚障害）が主催する「聴覚障害大学生による講演会」を紹介している。【基礎1】
- B特別支援学校（聴覚障害）では、各学年に1名の進路指導担当教員が配置されている。高1で模擬試験、進路見学、高2で職業適性検査などを行っている。年に1度、卒業生を囲む会を行い、キャリアについて考える機会を設けている。また、自立活動の時間にロールモデルとして聴覚障害成人を呼んでの自立活動講演会も実施している。また、大学進学希望者はできるだけ早い時期からオープンキャンパスに参加するように指導している。校内には各大学の情報保障や受験方法の情報が集約されており、希望する生徒は閲覧することができる。【基礎2】
- 学級担任を中心にA生徒の個別の教育支援計画と個別の指導計画を作成し、高等部教員全員での共通理解に努めている。年に2回の個別面談、3回の保護者会を実施している。【基礎3】
- B特別支援学校（聴覚障害）は聴覚活用や発話の他、手話も併用している学校である。校内には大型ディスプレイや見える校内放送が設置されている。また教室には補聴援助システムが配置されている。【基礎5】
- B特別支援学校（聴覚障害）には聴覚障害のある当事者教員が複数名在籍しており、生徒は聴覚障害者の大学進学について実体験を聞くことができる環境にある。【基礎6】
- 近隣の高等学校と交流を行っている。【基礎8】

4. 合意形成のプロセス

複数の大学のオープンキャンパス参加時に、保護者や手話通訳を伴って個別相談を実施し、大学側と情報保障に関する初期の相談を行った。第一志望校が決定した後には、保護者に加え、B 特別支援学校（聴覚障害）の進路担当者、担任、大学関係者を交えた事前相談が行われた。その後、受験時の配慮について書面にて申請した。大学合格後にも改めて大学担当者と相談の機会を持ち、入学後に提供可能な情報保障や支援体制について具体的な確認・調整を行い、最終的な合意形成に至った。

5. 合理的配慮の実際

【志望校合格まで】

- 補聴器や人工内耳を装用するようになった。【合理①－１－ １】
- オープンキャンパス参加時に、保護者や手話通訳を伴い、個別相談を通して受験時と入学後の情報保障について大学側と相談した。【合理①－１－ １】
- 受験時の配慮として、面接試験での筆談対応、音声認識ソフトの使用を依頼した。また、発話の聞き取りを補うために、プレゼンテーションで話す内容を読み原稿として提出した。【合理①－１－ １】
- 音声認識ソフトを利用して生徒本人のみでオープンキャンパスに参加し、大学生活を具体的にイメージできるよう配慮した。【合理①－２－ ２】
- 高等部の自立活動の時間において、「聞こえる社会で生きていくこと」について学習し、自身に適した情報保障の在り方を知った。【合理①－２－ ３】
- 第一志望校決定後、保護者に加え、進路担当者、担任、大学関係者を交えた事前相談を行い、受験時と入学後の配慮について共通理解を形成した。【合理②－２】

【大学入学まで】

- 入学後の情報保障としてノートテイク・パソコンテイク、音声認識ソフトの利用を依頼した。【合理①－１－ １】
- 入学式後のオリエンテーションにおいて、同じ学部の学生に対し、自身の聞こえの状態について説明する機会を得た。【合理①－２－ ２】
- 入学手続き完了後、改めて大学と面談を行い、入学後に可能な情報保障や支援体制について確認・調整した。【合理②－２】
- 入学後の講義においては、座席の確保を依頼し、情報を把握しやすい位置で学習できるよう配慮した。【合理③－１】

6. 本事例の成果と課題

A 生徒は、担任や進路指導担当者と一緒に、事前課題を準備した。1 次試験の書類審査を通過し、2 次試験のプレゼンテーションに進んだ。プレゼンテーションでは、事前相談で決定した情報保障を受けて、受験することができた。大学入学後は、情報保障を受けながら学習を続けている。